




## 学 位 論 文 審 査 の 要 旨

論文提出者	伊藤理妙
論文審査委員	(主査) 朝日大学歯学部 教授 永原 國央  (副査) 朝日大学歯学部 教授 江尻 貞一  (副査) 朝日大学歯学部 教授 澁谷 俊昭 
論文題目 全身的副甲状腺ホルモン間歇投与が骨組織再生に及ぼす影響	
<p><u>論文審査の要旨</u></p> <p>本論文は、既に報告されているヒト副甲状腺ホルモン(hPTH)の間歇投与による骨形成を促進作用が、歯科インプラント治療の臨床において高齢者の困難なGBR処置を含む歯科インプラント治療を、より予知性の高い治療とすることが可能であるかを検索する目的で、高度骨吸収例の実験モデルを作成し、その投与方法を含め、有用性についてビーグル犬3頭を用いて検討したものである。</p> <p>方法としては、抜歯治癒後に4週後に骨欠損を作成し、6週経過後GBR処置し、GBR処置後3週目に灌流固定を行い、下顎骨を採取した。hPTHは、GBR処置の2週間前から、6μg/kg/day、隔日週3回、投与したものをGBR処置前投与とし、GBR処置後2週間にわたり同量、同間隔で、投与したものをGBR処置後投与とした。またhPTHを投与せずその他の条件を同一にしたものをコントロールとした。採取した下顎骨の骨欠損部位を関心領域と設定し、新生骨の骨量(BV)以下6項目をマイクロCT3D骨形態計測法で測定し、骨欠損部位の骨形成を検索した。方法の詳細は、論文内容の要旨に記載した通りである。</p> <p>その結果、GBR処置前投与でBV、BMD、BMCが高値を示す傾向が認められた。またコントロールと比較して、GBR処置前投与とGBR処置後投与の骨欠損部の新生骨を含む全組織量あたりの新生骨の骨量(BV/TV)が多くなる傾向を明らかにしている。</p> <p>以上のことより、hPTHをGBR処置前投与することで、既に報告されているhPTHの作用機序である休止期骨芽細胞活性がなされたことで、GBR処置部位の骨形成が、速やかに行われる傾向にあることが認められた。このことが、臨床的に高齢者での高度骨吸収症例を含めた歯科インプラント治療において、GBR処置およびインプラント体埋入手術後の骨形成が速やかに行われ、予知性の高い歯科インプラント治療を提供できることが示唆されたと結論づけている。</p> <p>審査委員は、本論文が術前のhPTHを間歇投与が歯科インプラント治療の有益な処置と成り得る傾向にあることを明らかとしたものと評価し、博士(歯学)に値すると判定した。</p>	